



京都市社会教育委員が学校や地域に出向き、特別授業などを行う「京(みやこ)まなびミーティング」。
第37回となる今回は、稲垣 恭子先生に京都アスニーの「アスニー特別講演会」(令和4年6月24日実施)でご講演いただいた内容をご紹介します。

講師 京都市社会教育委員会 委員 ^{いながき}稲垣 ^{きょうこ}恭子 先生
京都大学理事・副学長



講演 「朝ドラと成長物語を考える」

〇はじめに

今日は、「朝ドラと成長物語を考える」というテーマでお話をさせていただきたいと思っています。

今日来ていただいた方々は、朝ドラのファンの方もいらっしゃると思いますが、朝ドラを毎日ご覧になっている方はどのくらいいらっしゃいますでしょうか。

(会場の方々が挙手)

結構多いですね、ありがとうございます。



成長物語という点から朝ドラを見ていらっしゃるかどうかはまた別だと思いますが、朝ドラファンとして、結構長く見ていらっしゃる方もいらして、毎朝15分ずつ見るのが習慣になっている方も多いと思います。朝ドラは今もう106作までできているんですね。

今日は、その朝ドラをテーマにしながら、成長物語、特に女の子の成長物語という点から、お話をさせていただきます。

〇今、なぜ成長物語？

私自身、何年か前から成長物語というものに関心を持つようになったのですが、なぜ今この時代に、成長物語を取り上げるのかということについて、少しお話しさせていただきたいと思います。

「人生はドラマのようなものだ」という言い方はしばしば耳にします。だれしも生きていくうちには良い

ことも悪いことも含めていろんな経験をするわけですが、その成り行きがどうなるかというのは、予想通りの展開があるわけではありません。こうなってほしいということがあっても、思いがけない出会いや失敗や挫折、その経験が転機になって、自分でも思っていなかったような人生がそこから開けていくということも結構あると思います。

計画通りの人生だと、安定はしているけれど、ちょっとつまらないなと思うこともあると思うんですね。逆に失敗や挫折を経験し、それを乗り越えたとき実感したときに、「自分もちょっと成長したな」と感じることも結構あるのではないかなと思うんですね。そういう人生ドラマの中で、子どもから大人に成長していくプロセスを描いたものが、広い意味での成長物語というものです。

よく知られている成長物語としては、児童文学とかいろんなものがありますが、私は映画にもなった「スタンド・バイ・ミー」という作品が大好きなのですが、出てくる登場人物は全員少年なんですね。男の子の成長物語が多く、女の子の成長物語はあまり知られていませんし、あっても女子限定で、男子はあんまり読んでいないということが多いと思います。

私自身、中学生の頃に大好きで愛読していた小説「赤毛のアン」は、女性の皆さんはご存知だと思いますけれども、男性の方で「赤毛のアン」を読んだことある方は…？

(会場の方々が挙手)

ありがとうございます。そういう方大好きです。

当時、女子なら大抵読んでいるくらい日本では人気のある小説でしたが、やはり女子限定のイメージがあって、男性はあまり読んでいなかったと思うんです。

ところが、割と最近、脳科学者の茂木健一郎さんが、NHK「100分で名著」という番組の中で、自分が「赤毛のアン」のファンで長年繰り返し読んできたとお

しゃっていたんです。意外に思いました。私が教えていた教育社会学のゼミでも、少女小説とか少女漫画を読んでいる男子というのは最近結構多いんですね。

そういうことから見ても、日本の社会が変化していく中で、改めて成長って何だろうと考えるときに、これまでの成長物語を中心に考えてきたこととはちょっと違う何か新鮮なものが、こういう少女小説や少女の成長物語の中にはあるんじゃないかという思いが出てきたんですね。

そういう目で見ると、朝ドラというのは、基本的には女性のヒロインが、小さいときからだんだん成長していく物語を主軸に、ドラマとして長く続いているものです。

今日は女の子の成長物語という点から朝ドラを見直しながら、今の社会、経済の観点から言うとあまり成長しない時代、「ポスト成長時代」の中での成長物語の可能性について、一緒に考える機会になればと思っています。

○成長物語とは

子どもから大人になるプロセスというのは、どんな社会でもどんな時代でも当然あるわけですけども、どのように成長し、どのように大人として認められていくかということは、社会によってそれぞれ違っています。

大きく括って三段階ぐらいで考えているんですけど、近代以前の社会、近代化が進んでいく前の共同体を中心とした社会では、大人になっていくプロセスというのは、通過儀礼を通して、社会的に大人として承認するという仕組みになっていました。

例えば生後 100 日のお参りをして、七五三という節目でみんながお祝いし、そして、成人式、それから結婚式と、節目節目で、みんなでお祝いします。このような通過儀礼を通して社会が子どもの成長と、大人の仲間入りを承認する仕組みになっていたわけです。

そういうふうに通過儀礼によって、大人になる道筋がはっきりしている社会では、特に大人になることが課題や問題として意識されることはあまりなかったと言っていいと思います。当たり前のことだったわけです。

ところが、社会が近代化し、職業や結婚、住む場所など自分で自分の人生を設計できるようになってきますと、自分に合った職業って一体どういうものなんだろう、いつ結婚して家庭を持とうかとか、そ

うことも含めて、いかに生きるべきかということが、それぞれにとっての問いとして浮上して参ります。

つまり、自分自身の内面を見つめて自己形成する、自分がどうやって大人になり、どのような形で社会に貢献するのか、ということをも自分自身で考えていくことが改めて課題になってくるというわけです。

しかし、自由に職業や人生を作っていくといいと急に言われても、ひな形やモデルがないと、なかなかどうやって生きていくかということも、ライフコースとして考えにくいわけですね。

今までであれば、親と同じ、うちの家ではこういうふうやってきたから、で済んでいたものが、自由にやりなさい、となるとかえって難しい。

そこで、いかに生きるかということをも主題にするような物語が、西洋の場合は近代化がかなり実質的に進んで 18~19 世紀にかけて登場してくるんですね。これが「ビルドゥングスロマン」、ビルドゥングスとはドイツ語で成長とか人間形成、ロマンとは小説の言い方でノベルとかロマンとかいろんな言い方があるんですけども、「ビルドゥングスロマン」=成長物語です。日本語では、教養小説と訳すのでかえってわかりにくいですが、大人になっていくプロセスを主題とする物語が「ビルドゥングスロマン」というジャンルになっていきます。

この「ビルドゥングスロマン」は、大体パターン・構造がございまして、地方出身の青年、これは基本的に男子なんですが、志を持って故郷を離れて、いろんな出会いや経験をする中で、危ない目にあったり、自信を失いかけてたりして、挫折感を味わうけれども、それを何とか乗り越えて、自分というものを見出して自立する。こういう物語を「ビルドゥングスロマン」と言います。

主人公の青年は大抵貧しくて、聡明ではあっても世事には疎い、結構単純な青年です。本を読んだりして多少社会を理解していても、現実の社会というのは知らない。主人公の地理的移動は、大抵地方から都会へとなっていますが、そのプロセスでいろんな出会い、困難や挫折を経験する。それと格闘して乗り越えて自立するというパターン。これを構造的に持っているのが、「ビルドゥングスロマン」です。

この典型的な作品が、ゲーテの「ウィルヘルム・マイスターの修業時代」です。これは、演劇人になることを目指して、田舎（地方）から都会に出てきた青年が、演劇の世界だけでなく、そのプロセスの中で宗教の世界や職人の世界に出会ったりする。思いがけないいろんな世界を経験し、これはまた「ビルドゥングス

ロマン」の重要なポイントですが、女性と出会って、そこで恋愛の経験と破綻の経験をする。それを通して、自分自身を知り、市民として生きていくことを選択する。演劇人として有名になることは諦めるんだけど、市民としてしっかりと生きていくということを自分自身が選択するという、そういう内容の非常に長編の物語です。

いろんな試練を経験するわけですけど、川本さん（英文学者の川本静子氏）は、わかりやすく言うと3つの試練が必ず出てくると言っています。

- ① 父による試練
- ② 女による試練
- ③ 金による試練

川本静子氏 「イギリス教養小説の系譜」2005より

という3つの試練が、この「ビルドゥングスロマン」には必ず登場すると。

父による試練ですけども、父というのは自分の血縁の父親という意味もありますが、それと同時に、その時代の既成の価値を体現する存在を父、社会的な父とする意味も含んでいるものです。この父親と対決して、父親とは違う新しい自分自身の生き方というのを見出し、父親を乗り越えて自立するという形で、地元や父から旅立っていくわけです。これが第1の試練です。父親の言いなりに唯々諾々とするのではなくて、父とは違う、と反抗するわけです。「エディプスコンプレックス」と言われたりしますけども、そうやって父と対決する、これが父による試練です。

第2の試練が女による試練。男の子が旅立ち、そこで女性の誘惑をいろいろと受ける。そういう女性をファミファタール（運命の女）と言ったりします。誘惑に負けて、その女性の方に全部つぎ込んでいくと、だまされたり、身を持ち崩して墮落してしまう。それで、自立したり成功する道から外れたりしてしまう。これを何とか頑張って踏みとどまると。これが女による試練です。

第3の試練は金による試練です。

「ウィルヘルム・マイスター」も、芸術家、演劇人になりたいと思って出発するわけですけども、芸術家とか、イギリスの場合ジェントルマン（紳士）を目指してということになるとその理想は、金銭的な成功とは別の価値にあります。芸術や紳士というのは、お金を持つことがゴールではない。違う価値の中に生きるということで、それが教養小説「ビルドゥングスロマン」の理想でもあるわけですね。

「ビルドゥングスロマン」は、このような3つの試練を乗り越えていくという物語になっている場合が多いです。こういうパターンを持つ日本の教養小説と

して有名なものは、夏目漱石の「三四郎」が当てはまると思います。

九州の田舎青年である小川三四郎が、東京に出るのですが、その途中の列車の中ですら、いろんな誘惑に出会うこととなります。それで東京に出ている人に出会ったり、誘惑にあたり、そして、美禰子さんという魅力的な女性との恋愛、こういうものを通して、人生の機微を知るようになっていく。

この小川三四郎が、日本が近代化する明治の青年にとっての新しい生き方のモデル「ビルドゥングスロマン」であったわけです。

このような成長物語は、近代社会では成功物語と実はパラレルになっていくという傾向があります。

今ご紹介したような、もともとの「ビルドゥングスロマン」は、若者が困難を乗り越えて人間的に成長するプロセスを描いたものなんですけども、それがしばしば、社会的に成功することと重なって、成功して立派な社会人になる成功物語と重なるようなものが結構出てくるが多くなっていきます。

だから、自立した後はゆらぎない大人になって、世間でも尊重される、人間的にも社会的にも右肩上がりなものを「成長」という言葉からイメージするのは、そういうことと重なっているということでもあります。社会的にも成功して、人間的にも成長する、これが何となくイメージとして定着した「ビルドゥングスロマン」、成長物語に実際にはなってきたということです。

○ポスト成長時代の成長

ところが、最近では、必ずしも社会的に成功することが成長することとは限らない、ということを実感することが多くなってきていると思うんです。

現在のように、生き方の多様化が一般化し、あるいはそれが勧められるという社会の中では、一体どういう状態になるのが成長なのか、どうしたら大人なのかということ自体が見えにくくなってきています。

さらに最近は、子どもと大人の境界があいまいになっているという現実もありまして、例えば、「友達親子」という言い方があると思いますが、親子が友達のような関係で、お洋服を共有して着たり、お母さんという言い方をしないで名前呼び合ったり、そういう関係の親子が結構いたりします。

あるいは、かつて前近代社会だったら、結婚したら一人前というイメージだったけれども、現在は結婚しないで独身でいつづけ、生活自体も子どもの頃からずっと変わらない生活習慣を持っているということも

ある。

また、就職して家庭を持ち、社会的に定着するというライフコースだけではなくて、頻繁に転職し、フリーターとして定職を持たずに生活するという方も増えてきています。

日本の社会を考えてみましても、そういった生き方の多様性と同時に、一方では経済成長がかなり停滞して、右肩上がりではなくなってきているわけですね。経済成長が、かえって自然や環境を破壊してしまっているという、今まで成長だと思って見てきたものがマイナスになっているんじゃないかという逆の価値観も出てくる状況になっています。

これまでの社会の規範の中では成功とされていたものが、必ずしもそれぞれの幸福や価値観につながらない。つまり、いわゆるビルドゥングスロマン的な物語が、もはやリアリティを持たなくなりつつある。そういうことが近年の実感としてあって、成長とか成長物語ということ自体がもう古いのではないかと、要らないのではないかとこの感覚が出てきています。

では、成長物語あるいは成長ということ自体、終わったのかということなんですけども、私がわざわざ新たな成長物語ということを考えようとしているのは、必ずしも成長物語ないし成長そのものが終焉したとは思っていないからです。

経済成長を中心とした社会の発展の中での成長は終焉したかもしれないけれども、それとは違った形で、一人一人がどうやって自分の成長を実感することができるかということは、むしろ、現在の社会では大きな一人一人の課題になっていると思います。また、その成長を実感すること自体が、我々個人にとって魅力のあること、成長を実感できるということはやっぱりうれしいことで、生きていく上での原動力になります。そういう意味では成長というコンセプト自体は、むしろ考え直していく上で大切なキーワードではないかと思うようになっていきます。

では、ポスト成長時代の成長をどのような方向から考えていったらいいだろうかということなんです。

先ほど申しましたように、これまでの成長物語はほぼ男の子、男子の成長を軸にした物語だったわけで、ですから社会的成功と重なるという話が多くなっていったわけなんです。

女の子の成長物語もないわけではないんですが、社会一般ではみんなが関心を持つというのではなくて、女の子が自分の物語として読むという消費のされ方が多かった。

つまり、いわゆる大文字の成長物語がリアリティを失

いつつある一方で、今まであまり社会的にはみんなが読むとか、モデルにするものではなかった女の子の成長物語が、実は今の社会の中で新鮮さだったり、面白さを発見したりすることができるんじゃないかと。

そこで、そういう観点から、国民的番組として長く続いている「NHK 朝の連続テレビ小説」を手がかりに、その一端を探ってみたいと思って、今日ご紹介したいと考えているわけです。



○朝ドラ「NHK 朝の連続テレビ小説」

ようやく朝ドラの話なんですけれども、「NHK 朝の連続テレビ小説」は、第1作の1961年の「娘と私」という作品から始まり、現在までずっと続いている番組で、今やっているのが「ちむどんどん」ですね。これが第106作目となるものです。

朝ドラが始まった1960年代は、お茶の間メディアがラジオからテレビに移っていく時期なんです。

ラジオでドラマを聞く「ラジオ小説」というのがその前段階にあって、そのスタイルを引き継いで、テレビ小説、連続で毎朝少しずつ聞くと話が連続するスタイルを踏襲して、テレビでも15分ずつつながっていくテレビ小説というスタイルのドラマとしてスタートしました。なので、「朝の連続テレビ小説」という名前になってるわけなんです。

100作を超える作品のほとんどは、女性の一生がテーマになっています。実は何作か男性が主人公の作品もあるんですけど、どれも人気がなく受けなかったということで、ほとんどが女性が主人公です。ですから朝ドラというのは、最初の頃から現在まで見ていきますと、女の子の成長がどういうふうに変わってきたか、女子の成長物語の変遷として見ていくこともできるようなものになっていると思います。

1960年代で一番人気があったのは「おはなはん」という作品です。大変に人気がありました。そのあと、「雲のじゅうたん」や「鳩子の海」、「マー姉ちゃん」とか、「濡つくし」も人気がありました。

それから、今日具体的に取り上げたいと思っているのが、「あまちゃん」ですね。それから「あさが来た」、「ひよっこ」。今言った3作品は全部、視聴率20%を超えた作品です。あと「ゲゲゲの女房」もすごく人気

があってこのあたりから、一時期朝ドラ人気が陰っていたんですけども、また 2010 年ぐらいから盛り返してきました。

こう見ていただきますと、主人公は全部女性、少女が大人になっていくという話になっているわけです。

一番人気があったのは「おしん」です。「おしん」は海外でも大人気になりまして、不動の視聴率を誇って 50 数%だったと思うんですけど、ものすごい人気でした。

初期で、朝ドラの一つのスタイルを作った作品と言われているのがこの「おはなはん」です。

榎山文枝さんが新人女優で、まだ女優として大成していないときに抜擢され、新人女優が女優として成長していくのと、ドラマの中で「おはなはん」が成長していくというのが重なるという意味でも非常に人気のあったドラマです。これも視聴率 45.8%という、当時のドラマの中でも驚異的な人気ぶりだったものです。私も子どものときでしたけども「おはなはん」を毎日見ていたのは覚えています。

この作品は女性の一代記というよりも少女が大人になっていく成長のプロセスにフォーカスをあてた作品で、この作品から女の子の成長物語というのが定着していく形になっていると思います。

この「おはなはん」のキャラクターが、このあとの朝ドラの何となく共通したイメージにもなっています。お転婆で、前向きで、頑張り屋で、かわいい、こういうヒロイン像、ヒロインの性格が受け継がれていくようになっていきます。

「おはなはん」の非常に懐かしい映像なんですけども、木に登って、自分の夫になる人を見えています。女学生が木に登るのだからお転婆ですね。そのあとの朝ドラにも、子ども時代に木に登って、というのは結構何度も出てくるパターンで、象徴的なイメージなんです。お転婆だけど、かわいくて元気、明るいというイメージです。このヒロインは、その時代の女性と全く等身大ではないんですけど、すごくかけ離れて先進的とか、チャレンジングというわけではなくて、ちょっと先の生き方をするというのが、そういう形で象徴されていると思うんですね。

「おはなはん」は、設定としては戦前の女学生ですから、良妻賢母主義の教育を受けているわけで職業婦人ではないんですね。このドラマが放送されたのは 1960 年代です。1960 年代は、日本では高等教育進学率は上がるんだけど専業主婦率も上がっていく時

代です。そういう時期で、視聴者の主婦層の人たちの生き方を肯定しながら、職業を持って働くことができなかったけど、その願望や夢をちょっと満たしてくれる。そんな感じもあります。

この「おはなはん」以降の朝ドラのヒロインというのは、その時代の視聴者が見たいと思う女性像を描いてきています。

1970 年代あたりからは、職業を持って働く女性のヒロインが多くなり、いろんな職業が出てきます。

1990 年代ぐらいは、朝ドラの低迷期になるんですけども、90 年代の終わりあたりからは、女性としてどう生きるかという自己実現がテーマになってきます。

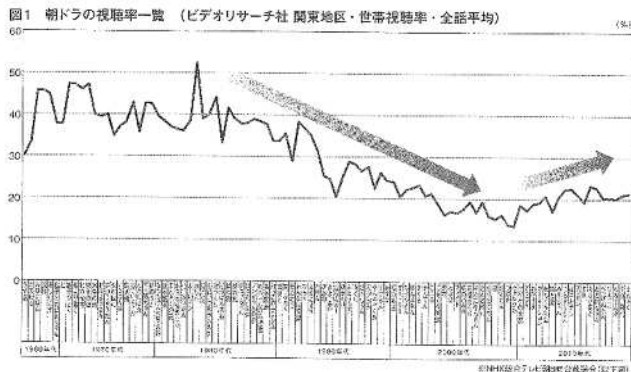
また、朝ドラは、戦争をどう経験して乗り越えてきたかというのが必ず入ってるモチーフなんですけども、2010 年代ぐらいからは、戦後の描き方にもかなり変化が見られるようになります。

この時期から、戦争の傷を癒すだけではなくて、女性が社会をどう変えていくのかというふうな描き方がでてくる。現在は戦後とはまた違った意味で、先の見えない時代になってきていますけども、こういう描き方が現在の私たちの生き方とちょっとつながって連想させるところもありますね。

私たちは朝ドラの調査をしているんですけども、その際、朝ドラ担当のディレクターやプロデューサーの方々にもいろんなお話を伺っています。日本の企業はどこでもそうなんですけど、朝ドラの制作を担当するのは、主に男性なんです。女性がヒロインなんですけど、女性プロデューサーというのは結構少ないです。1990 年代に NHK に入社して朝ドラのディレクターとして入った方によると、その当時 100 人のうち女性は 5 人だったと言っていましたから、非常に少なかったのだと思います。

○朝ドラはどう見られてきたか

ここで、朝ドラを視聴者がどう見てきたのかということ、少しお話できればと思います。この図は1960年代～2010年代の朝ドラの視聴率の変化を示したものです。



(出典：二瓶互、齋藤建作、吉川邦夫、亀村朋子「NHK連続テレビ小説と視聴者」『NHK放送文化研究所年報』2020年p.9)

これはNHK放送文化研究所が作ったデータなんですけど、「おはなはん」のはじめの1960年代70年代というのは、いずれも40%前後と高視聴率を得ています。そこから、1983年の「おしん」の52.6%というすごい視聴率をピークに低下し続けていくわけです。

それで、2010年度上半期の「ゲゲゲの女房」で18.6%と回復してから視聴率が上昇傾向に転じまして、2013年上半期の「あまちゃん」以降は20%前後の視聴率が維持されるようになっています。

1990年代は、民放のトレンドドラマがすごく人気ありまして、みんなそちらを見て、朝ドラは見なくなったということもあったと思うんですけども、最近逆に、トレンドドラマや民放のドラマも2桁の視聴率を取る作品は少なくなってきていますので、その意味では朝ドラの視聴率の好調さというのは面白い現象というか、人気がかなり回復してることになるんだと思うんですね。では、最近朝ドラ視聴者がどんな作品を見ているのかということなんですけど、この表は2009年以降の朝ドラで「見たことがある」ものを示したものです。

この「見たことがある」が半分以上で人気があるのは、「半分青い」「ひよっこ」「とと姉ちゃん」「あさが来た」「あまちゃん」などです。では、10年前に比べて、朝ドラの何が変わったと感じているのか。

これを見ていただきますと、「朝ドラに出演した俳優の活躍をよく目にするようになった」、「朝ドラをよく見るようになった」、「朝ドラを好きになった」というふうに、それまでさほど朝ドラに関心がなかった視

聴者も結構レギュラーな視聴者になってきているということがうかがえます。

表Ⅱ-1-2 2009年以降の各朝ドラを見たことがあるか
(100%＝朝ドラを見たことがある人 n=1,947) (%)

作品名(主演/放送年度)	見たことがある(半分以上)	見たことがある(半分以上/少ない)	見たことがある計
半分、青い。(永野芽都/2018)	36	20	56
わろてんか(葵わかな/2017)	32	18	50
ひよっこ(有村架純/2017)	33	18	51
べっぴんさん(芳根京子/2016)	28	15	43
とと姉ちゃん(高畑充希/2016)	33	17	50
あさが来た(波瑠/2015)	37	16	53
まれ(土屋太鳳/2015)	25	18	43
マッサン(シャーロット・K・フォックス/2014)	34	21	55
花子とアン(吉高由里子/2014)	32	17	49
ごちそうさん(杏/2013)	31	18	49
あまちゃん(能年玲奈(のん)/2013)	34	22	56
純と愛(夏菜/2012)	16	16	32
梅ちゃん先生(堀北真希/2012)	26	17	43
カーネーション(尾野真千子/2011)	23	15	38
おひさま(井上真央/2011)	20	14	34
てっちゃん(瀧本美織/2010)	17	14	31
ゲゲゲの女房(松下奈緒/2010)	29	25	53
ウエルかめ(倉科カナ/2009)	10	13	23
つばさ(多部未華子/2009)	9	12	21

※「半分、青い。」は調査時点で放送中

表Ⅱ-1-4 10年前に比べて朝ドラの何が変わったと感じるか (%)

	近年視聴者(n=1,324)	全体(n=3,000)	非視聴者(n=1,053)
朝ドラに出演した俳優の活躍をよく目にするようになった	59	37	15
朝ドラをよく見るようになった	54	27	4
朝ドラを好きになった	44	22	4
出演者が豪華になったと感じる	38	24	10
朝ドラに関するニュースを見聞きするようになった	37	24	10
作品のテーマや、モデルとなる人物が魅力的になったと感じる	37	21	6
周りの人と、朝ドラの話をするようになった	28	15	4

(出典：二瓶互、齋藤建作、吉川邦夫、亀村朋子「NHK連続テレビ小説と視聴者」『NHK放送文化研究所年報』2020年p.29)

また「朝ドラに関するニュースを見聞きするようになった」とか、「周りの人と、朝ドラの話をするようになった」というようなことで、作品のテーマやヒロインが魅力的になったということも多くなっています。朝ドラの定番イメージとは少し違った魅力も加わってきたということになるのかもしれませんが。

朝ドラの情緒的なイメージですが、ポジティブイメージとしては、「健全」「さわやか」「明るい」「安心」「前向き」、ネガティブイメージとしては「地味」「古臭い」「食い足りない」「ダサイ」とありますが、その中間に「優等生的」「無難」というのがあります。

近年の視聴者と過去の視聴者のイメージのパターンは似ているんですけども、近年の視聴者の方が、ポジティブイメージが高くなっています。健全で明るく

て前向きなことが、古臭いとかダサいというイメージでなくて、プラスのイメージとして受け入れられていることがうかがえるわけです。

こういうイメージの中でも、近年人気のドラマとして挙げられるのが、「あさが来た」「ひよっこ」「あまちゃん」といったところです。いずれも20%を超える視聴率を確保しています。これらの3つの作品の特徴や、どういうところに人気があるのかを少しご紹介してみたいと思います。

○「あさが来た」

まず、「あさが来た」ですが、視聴率が23.5%で、NHK放送文化研究所の調査では、評価が86点と高評価で、中でも、50%の人たちが90点以上をつけているという非常に好感度の高い作品です。2000年代に入ってからの朝ドラの中では最高視聴率を記録したものです。

女性に特に人気がありまして、男性の49%、女性の61%が高い評価をしています。女性に非常に支持された作品で、どこがというのがまた気になるところなんですけども。この作品は明治の女性実業家あるいは教育者としても活躍した広岡浅子さんという実在の人物をモデルとしたものです。

主人公は京都生まれで、京都の加島屋という大きな商家に嫁いで、これを立て直していくんですけど、さらに炭鉱ビジネスや生命保険会社（現在の大同生命）の設立を手掛け、また女性の教育のためということで、日本女子大学校、日本女子大学の設立に貢献するという人物です。いわば、明治のハンサムウーマンと言える人なんですけども、もちろんそのモデルは実在の人物ですが、ドラマでは大きく脚色をしていますので、フィクションに書き換えられています。

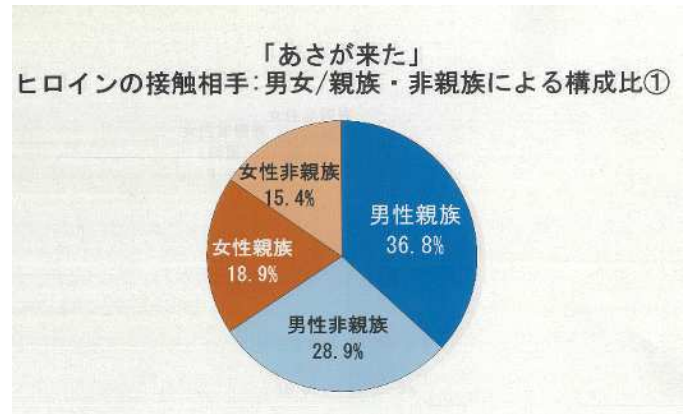
ヒロインの「あさ」が女優の波瑠さんで、彼女を支える夫の新次郎さん（玉木宏さん）、商売の心を教えてくれる五代さん（ディーン・フジオカさん）で、この番組が終わったときに、「五代ロス」になった人が続出したという、ディーン・フジオカさんが大人気になった番組でもあります。

このドラマは、いわば女性の成長物語であって、ビジネスを展開するとか、それをどうやって乗り越えて成功に持ち込んでいったかというビジネス物語ではないんですね。

女性の目覚ましい成功物語で当時としては一般的にはありえない展開ですが、男性の物語であれば、このビジネスをどうやって展開していったかという話が中心になると思います。一方でこの作品は、そ

うビジネスのディテールでなくて、その事業にまつわって、あささんの関わったいろんな人間関係、つまり、夫婦や姉妹関係、まわりの実業家や政治家、そういう人たちとの関係がきめ細かく描かれていまして、それが視聴者に響いているという感じなんです。

これは我々の研究グループのひとりが、ヒロインの「あさ」がどういう人たちと接触しているかというのを全645場面、全部合わせて99名の登場人物がどういう人たちなのかということのを全部数えて、グラフにしたものです。



(出典 井上慧真「社会関係資本の観点から」 稲垣他 ポスト近代社会における「成長物語」日本教育社会学会第71回大会2019年)

「あさ」が接触した相手としては、男性が65.7%と多くて、その内訳は親族が36.8%、親族以外が28.9%、女性の接触相手も、親族・非親族で同じぐらいとなってまして、いろんな人、特に男性との関わりの中で成長するという描き方が特徴になっています。

NHK放送文化研究所の調査でも、はじめの頃は、視聴者が女性のサクセスストーリーだと思って見ていたけれど、後半になるほど、家族愛、夫婦愛、親子愛というふうなところに惹かれていったと感想を書いている人が多くなっています。

こうやって家族に支えられていろんな人と出会ってどんどん新しい事業を広げていくという、こういう生き方が凛としていて素敵だというのもありますし、それだけでなく、サポートするまわりの男性がすごくいいということも人気があります。

夫の新次郎さんは登場人物の中で2番目に人気が高いわけですが、回を追うごとに好感度が上がってくるんですね。最初は、「あさ」を受け入れる包容力はあっても仕事の方がさっぱりで何か頼りないとか、情けないというふうに思う。特に男性視聴者はそう思う方が多かったようですけれども、中盤以降になると、裏で「あさ」を支える描写が増えて、妻が仕事をしやすいように陰で支えるのが旦那としての理想だという

意見とか、根回し上手で結構「やり手」、こんな感じに自分はなれないけど、いいなと思ったという男性視聴者の声も増えてくるようです。

このドラマは明治時代が舞台にはなってますが、働く女性の現実というのは、家庭と仕事の両立とか今も結構厳しいわけです。ドラマでは、理解のある夫が支えてくれて、仕事の上でもディーン・フジオカさんをはじめいろんな方が支えてくれる。見ている女性にとってはファンタジーなわけですね。

現実とはかなり違うフィクションになってますが、姉の「はつ」も世俗的な成功とは違うんだけど、逆境の中でも信念を持って生きていくという、「あさ」とは全然違う人生だけどそれはそれで重みがあるというか、渋い感じで好感を持たれています。このように姉妹がお互い違う生き方を認め合って支えている、これも好感度のひとつだったようです。

いろんな人が支え合って、社会を変えようと思ってる人たちが活躍する時代背景、このような観点から作品を見る。1人の女性のサクセスストーリーというよりも、新しい社会を夢見る人たちがいろんな関係の中で、それぞれ成長していく、そういう物語として見ている。そこがよかったということがうかがえるわけです。だから、いろんな生き方が肯定される、成長することと成功することが必ずしもイコールではない。こういうところに新鮮さを感じられた話なんだと思うんですね。

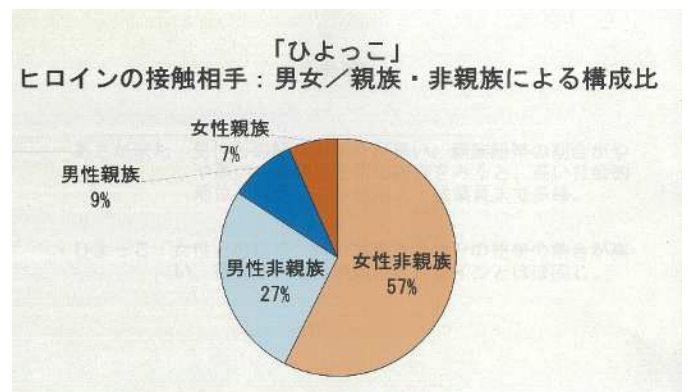
○「ひよっこ」

それから、「ひよっこ」も紹介したいんですけど、これも評価が高く視聴率も20.4%です。

これは高度経済成長期に地方から上京したヒロインの成長を扱ったもので、茨城から集団就職で東京に出てきます。最初、ラジオの組立工場に勤めますが、そこが潰れ、今度は「すすり亭」というレストランで働くようになるんですね。

そういう形で働きながら、いろんな人と出会って、そこで成長して行って、東京に根づいていくという、当時のごく普通の暮らしをしていた、集団就職で東京に出てきて頑張って生きていく女の子の成長物語なんです。

「あさが来た」とは全然違うごく普通の女の子なんですけども、やっぱりイメージとしては「健全」「さわやか」と似たイメージを持ってることが多くて、特にヒロインの「みね子」がすごく人気があって、90%以上の方が印象に残ったと言っているんですね。印象に残った人が、女性が多いということも特徴です。



(出典 井上慧真「社会関係資本の観点から」 稲垣他 ポスト近代社会における「成長物語」日本教育社会学会第71回大会 2019年)

この図も先ほどと同じように、全406場面、登場人物72名のうち、どういう人たちと接触しているかをグラフにしたものなんですけども、「あさが来た」とかなり違うのは、女性で親族以外の方が57%と圧倒的に多いのがわかります。男性の親族以外が27%で、親族がむしろ少なくなっています。

「あさが来た」が男性の親族や親族以外の人との関係の中で成長する描写が多かったのとはかなり違って、女性で親族以外、つまり友人、同年代の女の子たちとの具体的な関係の中で成長していくというストーリー展開になっているのが非常に特徴的だと思います。

この分析の中でも、接触する同級生の女の子たちが、「みね子、そんなにはっきり物を言う女の子だったっけ。」とか、「最近ちょっと変わったな、みね子。」というふうに、言葉に出して、みね子ちゃん成長したね、と言ってあげるシーンが結構ありまして、それがまた女の子同士の成長を支え合うスタイルの特徴にもなっていると指摘しています。

波乱万丈な展開はなくて、日常のことが細かく描かれています。ただ、みね子にとって辛いことや決断を迫られることも出てくるわけで、ラジオ工場が潰れたり、お互いに恋愛感情を持ったエリート大学生との交際に相手の親が反対してしまったりということもあります。そのときに、例えばその大学生の島谷さんが、親が反対しても結婚したいと言ってプロポーズするわけですが、それを断るというシーンがあるんですね。しっかり考えて、自分にとっても、相手にとっても幸せなほうを取るということで、自分は結婚しないという決断をするわけです。

そういう経験の中で、物怖じせず自分の意見を言って、社会的な成功とは違うけど自分の価値観をしっかりと作っていくということを成長として、みね子ちゃんが成長していくようにと応援する気持ちで番組を見

る、視聴者もそういう見かたをしていたようです。

「あさが来た」とは設定もストーリーも全然違うんですが、自分の突破力で自立するというよりも周囲の人たちとの関係の中で成長していくという物語である点では、共通していると言えるだろうと思いますね。

○「あまちゃん」

もう1つは「あまちゃん」。さっきの2つよりも前の作品になりますが、これも視聴率が高くて、人気脚本家の宮藤官九郎さんの作品です。時代設定は一番新しく東北の震災後の日本の社会を意識した作りになっているものです。

ストーリーは、高校生のアキちゃんを中心に、母親の春子さん、祖母の夏さんと、3世代の女性の生き方が描かれ、それぞれの時代背景や言葉、音楽もあって、懐かしいというか楽しい面もあります。

祖母の夏さんは2008年で64歳という設定ですから、1960年代に青春期を過ごして、「ひよっこ」と同年代なんですね。夏さんは当時、「ひよっこ」のように地方から上京する若者が多かった時代に、地元から出ないですと北三陸で暮らしているという設定です。

母親の春さんは42歳ですけども、18歳の時に歌手になりたいと家出して東京に出てるんですね。でもうまいかず、今は専業主婦として東京で暮らしています。

ドラマは、高校2年生のアキが東京から祖母の住む岩手県の北三陸に移動するところから始まります。東京では、いじめられっ子で暗い性格だったのが、祖母がいる北三陸に来て、海女の生活がすごくかっこいいと思って修行するようになるわけです。

ところがそれも束の間、今度は高校の潜水土木科で、男の子が潜ってるのを見て「かけー！」と途中で海女をやめてそっちに移ります。そうなのと思ってたら、仲良くなったユイちゃんと地元アイドルになって歌を歌うということになって。さらには上京して、アイドルグループに入るけれど全然上の方に行けなくて、影武者としてやってるというような、どれをやってもパツとしない感じなんですね。

だから、普通に成長物語として期待して見ていると、東京ではパツとしないアキちゃんが海女の修行で頑張っていて、きっと成功していくんだなと思っていたら、あれ、すぐやめるんやな。またこれもやめるわけねっていうふうに、どんどんやめていって、はしごを外されるんですけど、あまちゃんは、「これが今のおらの現実だ」とか言って別に平気なわけで、努力して頑張っ

て何かを達成するという成長物語とは全然外れていっちゃうわけなんですね。

何事も長続きしないやん、今の若者は、とも言えるんですけど、見ているうちに、海女の修業から潜水士からアイドルから女優から、いろんな世界を渡り歩いていって、そのプロセスで、新しい出会いがあったり、母親の知り合っていた人が女優になっていてその人と知り合い、古い絆がもう一回アキちゃんを通して結び直されたりと、彼女が移動することでいろんな境界が時間的にも空間的にも取り払われて、新しく絆が結び直されていくという面白さがあるわけです。

成功という意味でも自立という意味でも、成長物語とは言えなさそうなんだけど、アキちゃんが移動することによって、違う意味で本人もまわりも成長するんですよ。祖母の夏さんも母の春さんも、そしてアキちゃんもそれぞれ挫折を経験してそれを抱えながら生きてますし、コンプレックスもすごくあるんですね。実際にそのアキちゃんとユイちゃんが2人組でやる时候にも、「二人三脚で」と言うのを間違えて「おらとユイちゃんは二束三文だから」とか言っちゃうわけです。つまり、そちらの方が真実を突いていると言いますか、1人だけだとアイドルとしてどうせ成功しないけど、二束三文の2人がつながれば何とかなるだろうというわけです。未熟者同士でも、つながれば何か新しいものが生まれるんじゃないか。そういうところにロマンを感じさせるところがあるんですね。

従来の「ビルドゥングスロマン」が地方から都会へと一方向なのに対して、この物語は東京から地方へ、また東京へ行ってまた戻ってくるという、2往復ぐらいします。単なる地方回帰とか、田舎の自然が大事とか環境を破壊しちゃいけないとかいう話ではない。オタクのメディアの世界と海女の世界がつながったり、いろんな意味で、今まで別々の世界だったものが、あまちゃんの移動によって越境するわけです。時間的にも空間的にも社会的にも越境があって、それが新しいつながり、古いつながりの結び直しに生まれ変わっていく。

だからその中で、母の春さんも自分が挫折してしまったという気持ちがだんだん薄らいでいきますし、祖母の夏さんも、娘が出て行ったことに対して去る者は追わずで、帰ってこんでもいいと突っ張っていたわけですが、アキちゃんとのつながりが増えていく中で、去る者追わずだけではなくて、来る者は拒まずというようになるわけですね。それぞれがそれぞれの中で、成長していく物語になっているところが、新しいというか面白いところだと思うんです。

○ポスト成長時代の成長物語

これら3作品が、成長という点から見たときに、これまでの成長物語とどこが違うんだろうかということを経験に、紹介したいと思います。

まず従来の「ビルドゥングスロマン」における移動は、地方から都会へというパターンで、それが自立と成功の物語と重なることが多かったのですが、この3つの作品は、そういうパターンと違っているんですね。移動することが社会的な成功や自立につながるのではなくて、いろんな世界を移動することで、つながりや絆が広がり、そして深まっていく。その中で自分らしさが見出されていくという成長物語になっているということです。

また、近年人気の朝ドラでは、強い自己形成、自我の自立という物語よりも、自分や他者の弱さに対する感受性が前面に出ていると思います。他者を思いやる、「エンパシー」という言葉がこの頃よく使われますが、他者のスタンスでものを見る「エンパシー」の力が成長と自立に結びついていく、そのあたりも感じられるドラマが多くなっています。そのことは、波乱万丈のドラマ展開だけでなく、日常生活の描写が心に残っているという視聴者が多いところからもうかがえるのではないかなと思うんですね。

制作側の方の言葉で言うと、「長期的視野」と「短期的視野」がありまして、長年に話がドラマとして進んでいく部分と、その場面場面を作っていくというところで、実は短期的視点の場面づくりに制作者の側も意識しているようです。ちょっとした気持ちのやりとり、揺れ、そういうものが見ている側にもピンとくるものがあるんだろうと思いますね。

こう見てみますと、古典的な「ビルドゥングスロマン」が社会に出る物語だったとすると、近年の朝ドラに見られるような成長物語は、まわりの人たちと協力しながら社会を変えていく、一緒に変えていく、そういう物語に変わりつつあると言えるのではないかなと思います。

現代の社会は、経済成長という面でも、右肩上がりの成長が期待しにくい状況で、社会的・金銭的な成功が、人間的な成長を後押ししたり保障したりするものではなくなりつつあります。その意味では、従来の男子の成長をモデルとした「ビルドゥングスロマン」は終焉しつつあると言えることができるのかもしれないですね。となると、今の男の子にとっても、そういう成長物語が自分のモデルにはならないかもしれないわけですね。では、男子はどう生きるかというテーマが、改めて男子にとっても課題になってくるのではない

かと思うところもあります。

逆に、女の子の成長物語は、これまでは陰になっていたけれど、これからの社会の中で成長するということを経験する上で、いろんなサジェスションがありえるということを経験を、朝ドラを通して感じたところです。

強い自我を持った個人として自立するというよりも、弱さや足りなさを自覚したり、それを口に出してお互いが励まし合ったりしながら、新しい生き方や価値観、幸福感を探していこうと、そういう意味での成長が描かれてるものが多いということも発見かなと思うんですね。

近年のアニメや漫画でも、テーマやタイトルはそれぞれ違いますが、そういう成長が描かれた作品がみられるようになっていきます。最近のディズニーの映画でも、迎えに来た王子様を素通りして姉と抱き合うシーンで終わるといったものもありますし、多様な成長物語が出てきて、こういう中で、いろんな成長を子どもたち自身の中に見出していく契機があるのではないかな、と考えています。

これから新しい成長物語が多様に生まれてくる可能性もあって、男子・女子にかかわらず、自分の成長物語を改めて考えていく時代になったのかなというふうに思っています。

これで今日の講演を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。